



KITA1501

無差別爆撃と戦争責任

東京空襲 70 年はなぜこれほどまでに軽視されるのか
ドイツ連邦大統領 J・ガウクのドレスデン演説に触れて

2015 年 3 月

佐々木 建

1

3月10日は、第二次大戦を通じて最も凄惨な戦争被害で知られる東京空襲から70周年の日であった。なぜ私が「最も凄惨な」と表現するのか、その理由はこの文章の中で示すことになる。

国内メディアは、10日に都内で開催された「都内戦災並びに関東大震災遭難者春季慰霊大法要」について簡単な紹介をしてはいるものの、この空襲の歴史的意義に注意を払うこともなかったように思われる。まして東京都慰霊堂が関東大震災の遭難者を弔うために作られたもので、大空襲の犠牲者は便宜上そこに合葬されているにすぎないということを指摘するものはなかった。つまり、この法要は大空襲の死者だけのものではないことに注意を払うものはなかったのである。東京空襲の被害者は70年を経てもこの程度の扱いにとどめられているということなのだ。

しかもこの東京都に限られた法要に内閣総理大臣が出席して追悼の言葉を述べるという異例さについては論評されることはなかった。大阪、名古屋、神戸等の大都市の犠牲者だけでなく、私の生まれ育った北海道最東端のまちの犠牲者にいたるまで追悼するのではなく、なぜ東京にだけ出席するのか（この法要で

述べられた内閣総理大臣の追悼の辞の意義については後で論じたい)。

東京には空襲被害者を慰霊する独自の公的な慰霊碑も記念館も資料館もない。なぜか、その理由をはっきりしている。保守的な政治勢力の徹底した反対の結果なのだ(1)。東京にとどまらず、空襲被害を受けた全国 70 あまりの都市でも状況は基本的に同じである。このままでは体験の記憶も遺品も蒐集されずに散逸してしまう。東京での犠牲者追悼法要に参列するというからには、いったい過去の戦争の国内での被害に対する認識がどのようなものなのか、空襲被害者の一人として是非知りたいと思うのは当然のことであろう(2)。

東京の中心部を一昼夜のうちに焼き尽くし、驚くなかれ 10 万人もの命を奪った無差別爆撃、現代であれば人道に対する罪として追求され、その首謀者は国際法廷で断罪される筈の大量殺人の事実がこれほどまでに軽視されてよいものだろうか。しかも、東京空襲はこの国全体に拡大した都市に対する空襲の連鎖の要(かなめ)であり、沖縄戦、広島・長崎への原爆投下と続く国内での戦争の序曲であり、その頂点であった。

後で述べるドレスデン空襲がヨーロッパにおける空爆の象徴として記憶されているとすれば、首都東京に対する空襲も、広島、長崎、沖縄と並んで、あの戦争の非人間性、無謀な戦争に乗り出し、敗北が明白になってもなお戦争を止めずに国民に犠牲を強いた日本軍国主義が生み出した惨禍の象徴として記憶さ

れるべきだと、私は思う。

これまでの「戦後 70 年」談話を再検討するというのであれば、この空襲とそれに引き続く国内に引き込まれた戦争の意味も明確に述べてほしい。政治的力を持つ人たちのこの沈黙と黙殺はいったい何なのだろうか。無駄死にを強いられた特攻隊員の死だけが美化され、愛国主義的宣伝に徹底的に利用されているというのに、国内に戦争を引き込んで 70 以上もの都市の住民に強いて 30 万を超える人びとに死と犠牲を強いたことはいったいどのように考えたらよいのか。被害者の一人として私はそのように問い続ける責任がある。

2

この国を支配している人たちの東京空襲そのものを無視する態度や認識のいい加減さの本質を、ロンドンで発行されている著名な経済誌『エコノミスト』(*The Economist*) の記者は見抜いていた。その電子版は 2015 年 3 月 7 日発行の同誌アジア版から長文の記事を転載している。

「日本とその過去—いまだに消化されない歴史—」(Japan and

the past. Undigested History) と題した東京発の記事で、その冒頭で「犠牲者としてであれ侵略者としてであれ、この国は過去と向き合うことは難しいことのようにだ」と太字で強調している(3)。

ドイツのドレスデン空襲と比較しながら、この国では 70 以上の都市で 30 万もの人が殺された言うのに、空襲が注目されず、記念館もないことは奇妙なことだ、唯一の公的な活動は、関東大震災遭難者の慰霊堂に合葬することが 2009 年によく始まったことだけだ、と指摘する。

この記事は早乙女勝元氏への取材に基づいているようだが、博物館建設計画も 1990 年代（石原晋太郎知事の時代一筆者一）に頓挫してしまった。保守派の反対理由は、戦争犯罪の展示も含む計画は反愛国的であり「マゾヒスティック」だというものだったという。

「民間人の被害を認めるのがむずかしいのであれば、日本の軍隊がアジアで行った残虐行為を受け入れることなど日本のナショナリストたちにははるかに難しいことだ」と言う。これが記者の一番強調したかったことだと思う（この論理を展開させて、河野談話、村山談話をめぐる安倍晋三総理大臣の態度の紹介をしているが、この問題は私のこの文章の主な課題ではないので省略する）。

東京空襲に象徴される一連の都市空襲に対するいい加減な態度が、新たに出されるという「戦後 70 年」の総理大臣談話と

同じように国際的に注目されていることに注目しておかなければならない。

以下にこの記事で示されている空襲被害の国際比較の表を示しておこう。日本の空襲被害者は東京を含めて 30 万人、これに広島 の 14 万人、長崎の 7 万 4000 人を加えると、実に 51 万

Target	Estimated deaths	Date	Perpetrator
Warsaw, Poland	25,800	Sep 1939	Germany
Britain (of which London)	40,000 (20,000)	Sep 1940-May 1941	Germany
Dresden, Germany	18,000	Feb 13th-15th 1945	Britain & US
Japan* (of which Tokyo [†])	300,000 (100,000 [†])	Nov 1944-Aug 1945	United States
🇺🇸 Hiroshima, Japan	140,000	Aug 6th 1945	United States
🇺🇸 Nagasaki, Japan	74,000	Aug 9th 1945	United States

Source: *The Economist* *Excludes atomic bombs [†]March 9th-10th 1945

4000 人にのぼる。負傷者や家族を失った人の数も数えられなければならないが、ここでは示されていない。

私の年齢に近い人びとで深刻な火傷の跡を身体に残している人びとは、たいていは空襲の被害者である。ある時私は顔に火傷の跡を残している若い友人の一人に問うてみた。東京大空襲に遭遇されたのではと。そうですとの答えが返ってきたが、彼はおそらく母の背に負われて逃げる時に焼夷弾攻撃にさらされたのであろう。猛火の中を逃げ回ったことなどまったく覚えていないと言った。それだけに悲惨の思いが私の胸中で増幅されたものだった。

焼夷弾はナチスのゲルニカに対する無差別爆撃で歴史上初め

て使用されたのだが、アメリカが日本の都市の木造建造物を焼き尽くすためにさらに精緻に開発した武器である。ナチといひアメリカといひ、どちらも民間人を無差別に攻撃し焼き尽くす武器として開発し、それを都市空襲に使ったのである。この焼夷弾は朝鮮戦争、ベトナム戦争ではナパーム弾に改良され、あらゆる命を瞬時に焼き尽くす悪魔的な兵器としてその非人間性を発揮した。

この焼夷弾の使用、そしてそれを最も効果的に投下する軍事技術を開発、使用したというだけでも、東京空襲は人間の殺戮の戦争の最も凄惨な形として歴史に書きとどめられなければならない。それはゲルニカやドレスデン、ロンドンどころではなかったのである。

上の表に関わって言えば、殺された住民の数字だけでは一面的だ。殺した数字も書き加えなければならない。日本がアジアの都市に加えた無差別爆撃も書き加えられなければならない。その象徴は、四川省重慶に対する無差別爆撃であった。1938年2月18日から43年8月23日まで5年半にわたり216回の爆撃が重慶とその周辺に対して行われ、死者は6万1390人と推定されている(4)。

これだけの死者を出しながら、声を上げずにおれるものだろうか。この事実に向き合わない支配層の態度をどのように理解したらよいのだろうか。『エコノミスト』誌の指摘をまつまでもなく、この国では過去に向き合うことは難しい。何故だろう

か、よく考えてみなければならない。

3

2月13日は、すでに参照した『エコノミスト』でも紹介されているドイツ・ドレスデン市の空襲70年の記念日であった。70年前のこの日の夜、イギリス空軍の無差別爆撃が敢行され、エルベ河畔のフィレンツェとまで讃えられたバロック都市の中心部は灰燼と化し、死者は2万5000人にのぼった。毎年記念式典が執り行われるが、今年は戦後70年ということもあって注目を集めた。なかでも、和解の象徴として世界中からの基金によって再建された聖母教会においてドレスデン市民と関係各国の代表を前に行われたドイツ連邦大統領ヨアヒム・ガウクの演説はその式典の歴史的意義を明らかにした名演説であったと、私は思う(5)。

大統領の基本的態度は、この演説の中程で強調される次の箇所を示される。

「私どもはあらためて強調したいのです。私どもはこの殺戮的戦争を誰が始めたのかを知っております。ですから私どもが

今日この場所でドイツの犠牲者に思いをはせるとき、ドイツの戦争遂行がもたらした犠牲者のことも決して忘れてはならないし、これからも決して忘れないでしょう」。

このような立場に立つからこそ、彼はこの演説の表題を「ドレスデン空襲」とはせず、あえて「ドレスデン破壊」としたように思われる。大統領の立場はこの演説の中で見事なまでに貫かれている。彼は連合国の空爆によって被害を受けたドイツの諸都市だけでなく、ドイツが空爆した諸都市にも言及する。公正な態度と言わなければならない。

この演説を通じて幾度も強調されるのは、相互理解と人間的連帯、そして平和である。いかに蹉跎がくり返されようとも、これらの価値はゆるぎない、と強調する。

このような時代認識を大胆に鮮明に表明できる政治家を頂く国民は幸運であると、私は思う。

このようなドイツの指導的な政治家たちの歴史認識と態度は、戦後 40 年を記念してドイツ連邦議会で行った歴史に残る名演説(6)によって日本でも著名なりヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー元ドイツ連邦大統領の死去、アンゲラ・メルケル首相の訪日によって、日本のメディアでも盛んに取り上げられた。特にメルケル氏の日本滞在中の発言は日本の状況に対する強烈な批判を含んでいたように思われる(7)。

いずれにしても、前の戦争に対する認識でドイツと日本の指

導的政治家たちの考え方が対照的であることは誰の目にも明らかになった。対立的であるといったほうがよいかもしれない。この対立が国際政治の舞台でどのような帰結にいたるのか、対立の意義を過小評価すべきではない。

4

枢軸国として第二次大戦をともに戦ったドイツと日本とで、政治的指導者の過去の評価がどうしてこうも違うのだろうか。しかも戦争責任一般についてだけではない、空襲に対する態度でもその違いは明らかなのだ。

安倍晋三総理大臣はこの文章の冒頭で紹介した法要に出席し、「追悼の辞」を読み上げているが、その中で次のように強調する。

「・・・歳月が流れようとも、私たちは、このこと（大空襲の犠牲一筆者）を一時たりとも忘れません。

私たちは、平和への誓いの下、過去に対して謙虚に向き合い、悲惨な戦争の教訓を深く胸に刻みながら、世界の恒久平和のために、能う限り貢献してまいります」（8）。

あえてコメントはしない。とはいっても、私はせめて最小限のことだけでもここで指摘したい気持ちをどうしても抑えることはできないでいる。

第一に、この「追悼の辞」の大半は関東大震災の被害者に向けられたものである。それだけに、空襲被害者に対する心情は薄められているといわざるをえない。私はもっと正面から空襲に向き合った言葉を聞きたいのだ。

第二に、この追悼の辞はどうして全国の空襲被害者に向けられていないのか。他の都市の被害者や関係者はこれが自分たちに向けられているとは決して考えないだろう。少なくとも私はこの言葉が自分に向けられたものとは考えないし、これによって心を揺り動かされることもない。

第三に、「一時たりとも忘れません」という表現は、市井で執り行われる追悼式で読み上げられる通り一遍の弔辞ならいざ知らず、総理大臣の弔辞に使われる表現ではないだろう。政治家として何をしてきたか、これから何をするかが問われているというのに。空襲被害者はみな、彼らが何もしてこなかった、これからもする気がないということは感じ取っているし、よく知っている。

最近、私は方々で言葉の軽さをつくづく感じさせられ、そのたびに虚しくなる。選び抜かれた表現、歴史的事実裏付けられた規定、そして論理的でありながら表現するものの感性を感

じ取れる文章、こういうものに出会う機会が少なくなった。別の表現もあったろうにといつも思うのである。8月15日に行われる戦没者慰霊式典で総理大臣がどのような言葉を発するか、これと同じものの繰り返しなのか、それとも今回とは違った格調高いものなのか、注意深く見届けることにしよう。

第四に、「過去に謙虚に向き合う」という。本当にそうするのか。あの空襲は明らかに市民の殺傷を狙ったアメリカの無差別爆撃であった。無差別爆撃を弾劾する言葉が保守層から発せられることがないことは、簡単に理解できることだ。なにしろ、こともあろうに無差別爆撃を指揮したカーチス・ルメイに勲一等の勲章を授与して彼の犯罪的戦闘行為を免罪したのだから(9)。戦勝国アメリカへの卑屈とも見える屈服、これが日本の保守的政治家に共通の心情なのだ。戦争を国内に呼び込んだものたちの責任に言及することも決してないだろう。そうだとすれば、この文章はただの飾りに過ぎない。

私も含めてほとんどの空襲被害者はあの戦争をのろった。戦争はもうこりごりだと思った。それだけに新しく公布された憲法の前文と第9条を熱い気持ちで迎えた。過去に真摯に向き合うというのなら、私ども持ち続けてきた態度と積極的平和主義とは相容れない。

5

国外で兵士として戦争を体験した人びとはいうに及ばず、国内で戦争を体験した人びとも私も含めてすでに老いている。その体験が語られない以上、戦争体験の風化は避けがたい。しかしまだ書く力が残っている人は多くいる。私自身も、微力ながら書く力によってその風化に抵抗していくつもりだ(10)。

この文章に写真を2枚添付することにした。私が生まれ育ったまちは、1945年7月14、15日にアメリカ海軍艦載機による空襲を受けた。「北海道空襲」として総括される一連の空襲攻撃が北海道の太平洋岸の都市を中心に襲った、私のまちはその一部である(11)。私の生まれ育ったまちは甚大な被害を受けた(12)。私と私の家族は家族の一人を失っただけでなく、戦後絶対的な貧困の状態で暮らすことを強いられた(北海道空襲と私のまちへの攻撃の意義については、執筆中の「私の戦争」シリーズの続編で詳しく論じるつもりだ)。

この写真は、私のまちの空爆の状況を米軍が撮影したもので、15日のおそらく第二波の空襲の時に撮影されたものと思われる(13)。2枚目の写真はすでに菊池慶一氏がその著書で一部を拡大して公表している(14)。



この写真を見て、あの日から 70 年も経つというのに、私は落涙を抑えることができない。私の家は 2 枚目の写真の右下に、艦載機のプロペラのあたりに写っている筈だ。近くの倉庫から火の手が上がり、私の家に猛火は迫っていた筈だ。すでに炎上しているかもしれない。私をあれほどまでに可愛がってくれた祖母も焼死する瀬戸際にあつた、まさにその時の写真である。私が住んでいたまち、私の家の辺り、私の通学路、友だちと遊んだ遊んだ浜の情景が消滅する直前の姿をこれほどはつきりと俯瞰してくれた写真は初めて見た。それだけにそれが瞬時に失われたことの悲しみは募るばかりだ。通り一遍の弔辞などでこの悲しみが和らげられる筈もない。

攻撃によって燃え始めた地域は住宅地で、軍事的施設などまತ್ತくないところであつた。倉庫などの港湾施設を攻撃せずに、まず住宅地を攻撃したことは、写真からみて明らかだ。北海道空襲では東京などとは違い焼夷弾は使用されなかった。そのため、攻撃の規模の割には人的被害は少なかったのだが、東京空襲にはないロケット砲が使用され、急降下からの機銃掃射は恐怖であつた。艦載機の爆音、急降下の時に発する特有のうなりは今でも思い出される。悪夢である。

それにしてもこの写真で見る限り、爆弾の無秩序に民家に投下されている。破壊せよ破壊せよ、焼き尽くせ焼き尽くせ、これが命令のすべてだつたのではないか。当時、日本の都市空爆の最高責任者であつたヘンリー・アーノルドは、大都市爆撃の

目的は工業設備の破壊にとどまらず、都市の労働者の崩壊にあり、「死傷による労働力の崩壊」にあると明言した。労働者だけをその居住地から選び出して殺傷することなど不可能である。家族もろともその居住地で殺傷すること、それが無差別爆撃の目標であった(15)。

私が少年時代から学生時代の頃に抱いていた疑念と結論は、この無差別爆撃の責任は何よりもまずアメリカが負うべきではないか、ということだった。アメリカ人の人種差別意識が、原子爆弾投下と同じように、かくも残酷な無差別爆撃を可能にしたのではないかと。しかし、私なりに歴史に向き合う中で、戦争を始めたものたちの責任だけでなく、負け戦とわかっていながら本土決戦を叫んで国内に戦争を引き込んだものたちの役割も理解できるようになった。過去の歴史に真摯に向き合うというなら、その結論を私たちに事実をふまえてわかりやすく明確に示してほしいものだ。

いま空襲の被害を受けた、国内戦を体験した都市や地域は、広島、長崎、沖縄を除いてどこにも戦争の痕跡を見ることはできない。おおやけの記念館も慰霊碑もそれらの都市では見当たらない。風化は進む。風化の流れを阻止するためには、戦争の現実を直視し、戦争を始め引き延ばしたものたちの責任を明らかにし、自国の過去の歴史に真摯に向き合うことをしない指導者たちを批判し、過去の戦争の現実を踏まえた平和教育を再興することことだ。それ以外に道はない。

私がリヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカーやヨアヒム・ガウクの演説に共感するのは、私のなにがしかの、しかし全面的ではない「ドイツ鼻眞氣質」のせいでは決してない。指導的立場にある人は、政治家であれ学者であれ、過去に真摯に向き合っ
てほしい。その態度を明確にしてほしいのだ。さらにいえば、ドイツの政治家たちの通りには言わないまでも、過去の歴史の重みを感じて言葉を選びとる彼らの態度に共感してほしいからなのだ。

【注】

- (1) 経過は荒井信一氏の次の著書に詳しい。荒井信一『空爆の歴史―終わらない大量虐殺―』岩波新書 1144、岩波書店、2008年8月、223-227ページ
- (2) 先日、東京空襲写真集の決定版とも言うべき大部の写真集が出版された。早乙女勝元監修・東京大空襲・戦災資料センター編集『決定版 東京空襲写真集―アメリカ軍の無差別爆撃による被害記録―』勉誠出版、2015年1月30日。大型本で500ページを超える大著なので、本屋の店頭で手に取ってみるのも難しい重さである。多くの図書館で購入されることを

期待したい。

(3) www.economist.com/news/asia/21645844-whether-victim-or-aggressor-country-finds-it-hard-face-up-past-undigested 紙の雑誌の記事は次で見ることがができる。 *The Economist*, March 7th-13th 2015, p.28

(4) 荒井信一、前掲書、59-60 ページ。重慶爆撃については、荒井信一氏を中心に執筆された次の書物を参照。戦争と空爆問題研究会『重慶爆撃とは何だったのかーもうひとつの日中戦争ー』高文研、2009年1月

(5) この演説の全文は、ドイツ連邦共和国大統領府のホームページから英語訳も含め入手できる。駐日ドイツ大使館のホームページからもアクセスできる。残念なことにこの演説の日本語訳は大使館ホームページに見当たらない。翻訳を切望する。

www.bundespraesident.de/De/bundespraesident/Reden/Gedenken_zum_70.
Jahrestag der Zerstörung Dresdens

(6) リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカーの歴史的な演説、Richard von Weizsäcker, Zum 40. Jahrestag der Beendigung des Krieges in Europa und der nationalsozialistischen Gewaltherrschaft. Ansprache am 8. Mai 1985 in der Gedenkstunde im Plenarsaal des Deutschen Bundestages のドイツ語全文は上で紹介したドイツ大統領府のホームページから英語版も PDF 版を含めて入手できる。駐日ドイツ大使館のホームページからもアクセスできる。日本語訳は永井清彦氏の訳出されたものを今でも入手できる。リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー、永井清彦訳・解説『新版 荒れ野の40年ーヴァイツゼッカー大統領ドイツ終戦40周年記念演説ー』岩波ブックレット No.767、岩波書店、2009年10月

「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります」(永井訳、11 ページ) というくだりはよく引用されるが、実際のところ、あまり読まれてはいないのではないだろうか。このような時代だからこそ、読まれ読み直されることを望む。

(7)ところが、メディアに登場する評論家と称する人たちの意見を聞いていると、ある人はこの演説が示す高い道徳性を評価しながら、そうはいつでもドイツの中にもいろいろ問題はあるのですよとといい、ある人はドイツでできたのはそれを受けいれる枠組みがあったからですよ、日本をめぐる国際環境をみると不可能なことでも付け加える。このような留保をつけるには一定の政治的背景があるのではないかと、彼らのジャーナリストとしての品位に疑念さえ抱く。ドイツの国内にはいまなお根強く反ユダヤ主義が根付いており、それが時々頭をもたげることは承知している。最近の移民排斥運動の高まりも承知している。評論家諸氏がそのような態度であるなら、ドイツと違ってどのような形で表明されるのが望ましいと考えているのか、率直に表明してほしいものだ。さらに言えば、日本の政治的指導者たちはドイツの政治家たちの識見と政治的道徳の点ででかくも違うのか、についても意見を伺いたいものだ。一体あの戦争についてご自身はどのように評価されているのかについても率直に披瀝してほしいものだ。

(8)全文は首相官邸のホームページから入手できる。 www.kantei.go.jp

(9)昨年「私の戦争」と副題をつけた連作を発表している。アマゾン・ダイレクトパブリッシングで次のタイトルで入手できる。佐々木建『すり込まれている筈の風景—私の戦争 序章—』ADP、2014年8月

- (10)1964 年、自衛隊の育成に貢献したということで勲一等の勲章が授与された。当時の総理大臣は佐藤栄作であった。その経過については、栗原俊雄氏の次の著作を参照。栗原俊雄『勲章一知られざる素顔一』岩波新書 1306、岩波書店、2011 年 4 月、167-170 ページ
- (11)菊池慶一『語りつぐ北海道空襲』2007 年 8 月、北海道新聞社。氏の数字によると、空襲を受けた市町村は 79、死者 1958 人、負傷者 970 人、被害戸数 6680、罹災人口 3 万 3400 としている。実際にはこれよりも多い筈だ。軍隊の被害（兵士、軍属、準軍属）や朝鮮人、中国人の死者数はわからないままだ（同上、8-9 ページ）。
- (12)根室空襲研究会は再検証によって死者数を 209 人と確定した。従来の 199 人という数字よりも 10 人増えた。根室空襲研究会『根室空襲』根室空襲研究会、1993 年 9 月、22 ページ。前述の菊池慶一の著書では、根室の死者数を 385 人としているが、これは撃沈された船舶の乗船者数を加えているからだ。菊池慶一、前掲書、14 ページ
- (13)国立国会図書館所蔵、Aircraft action report No. VT31-4 1945/07/15 : Report No.2-d(15) * USSBS Belleuau Wood, USSBS Index Section 7 米国戦力爆撃調査団文書 (RG243) /艦載機戦闘報告書 (Entry 55) による。
- (14)菊池慶一、前掲書、329 ページ
- (15)同上、140-141 ページ

【参照文献・ウェブサイト】

荒井信一『空爆の歴史—終わらない大量虐殺—』岩波新書 1144、岩波書店、2008年8月

リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー、永井清彦訳・解説『新版 荒れ野の40年—ヴァイツゼッカー大統領ドイツ終戦 40周年記念演説—』岩波ブックレット No.767、岩波書店、2009年10月

菊池慶一『語りつぐ北海道空襲』、北海道新聞社、2007年8月

栗原俊雄『勲章—知られざる素顔—』岩波新書 1306、岩波書店、2011年4月

早乙女勝元監修・東京大空襲・戦災資料センター編集『決定版 東京空襲写真集—アメリカ軍の無差別爆撃による被害記録—』勉誠出版、2015年1月

佐々木建『すり込まれている筈の風景—私の戦争 序章—』アマゾン・ダイレクトパブリッシング、2014年8月

戦争と空爆問題研究会『重慶爆撃とは何だったのか—もうひとつの日中戦争—』高文研、2009年1月

根室空襲研究会『根室空襲』根室空襲研究会、1993年9月

Aircraft action report No. VT31-4 1945/07/15 : Report No.2-d(15) * USSBS Belleau Wood, USSBS Index Section 7 米国戦力爆撃調査団文書 (RG243) /艦載機戦闘報告書 (Entry 55)

www.bundespraesident.de

www.economist.com

www.kantei.go.jp